

# 上杉家伝来鎧下着・着込み・頭巾等四領二個 上

—— 伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告 六 ——

神 谷 榮 子

## 内 容

- 一 はじめに
- 二 鎧下着・着込み・頭巾等四領二個の概要
- 三 各鎧下着・着込み・頭巾について
  - (1) 伝景勝所用紺麻地鍔繫ぎ矢車文鎧下着
  - (2) 伝景勝所用紅縮緬鎧下着
  - (3) 伝謙信所用白平絹鎧下着
  - (4) 伝謙信所用鎖帷子
  - (5) 伝謙信所用烏帽子形白綾頭巾
  - (6) 伝謙信所用鎖頭巾
- 四 むすび

## 一 はじめに

陣羽織・鎧下着・着込み等の武装関係服飾についても従来は室町・桃山期の遺品資料が少くて、戦国時代のそれらを知るのに実物に即した研究を通して会得することは不可能であった。さいわい昭和三十年に上杉家の服飾類が発見され、その中に八領の陣羽織、三領の鎧下着、着込み

としての鎖帷子一領、鎖頭巾一個、烏帽子形頭巾一個があり、何れも伝来がよく、仕立てが当初のままの「うぶ」な形で資料価値としても極めて高く、当時の武装関係服飾を知る上の大きな手がかりとなった。陣羽織八領に関してはすでに報告五として美術研究二五九号誌上に発表したもので本稿では陣羽織を除く四領二個の報告を行い今後の研究に資したいと考える。

## 二 鎧下着・着込み・頭巾等四領二個の概要

上杉家に伝来する鎧下着・着込み・頭巾等四領二個のうち、上杉景勝(弘治元〜元和九 1575-1633)所用と伝えられているのは紺麻地鍔繫ぎ矢車文鎧下着(1)と紅縮緬鎧下着(2)の二領で、他(3)(4)(5)(6)は上杉謙信(享祿三〜天正六 1578)所用と伝えられている。その伝来に従い、更に後述調査事項から考察すると、これら四領二個の武装服飾も上杉家に伝来する八領の陣羽織と共に今日残っている戦国時代後期の武装服飾では最古のもので貴重な存在である。

鎧下着や着込みは全くの下着的衣料で、いわば実用一点張りといった

表1. 伝上杉謙信・上杉景勝所用鎧下着・着込み 形状・法量一覧表

(寸法の単位はcm)

	a 袖幅	b 後身幅	c 襟 キ×2	d ア 襟下り	e 立袂	f 衿幅	g 合袂幅	h 前身幅	i 衿	j 袖口	k 襟幅	l 袖丈	m 身丈	裾 アケ	背紐位置 後襟下り の寸法	重量
伝景勝所用 (1)紺麻地鑲 矢車文鎧 下着(給)	18.0	24.5	8.0	—	—	—	—	29.0	42.5	—	3.0	26.5	66.0	12.0	34.0	260 g
伝景勝所用 (2)紅縮緬鎧 下着(綿入)	17.0	24.5	11.0	—	—	—	—	25.5	41.5	—	3.0	30.0	64.0	12.0	34.0	183 g
伝謙信所用 (3)白平絹鎧 下着(綿入)	46.5	肩27.5 裾35.5	16.0	11.5	16.8	19.0	18.0	35.0	74.0	15.5	10.5	袖付 26.5	103.0	—	—	595 g
伝謙信所用 (4)鎖帷子	不詳	不詳	22.0	—	—	—	—	不詳	68.0	全開	—	54.0	85.0	脇は 全開	—	3900 g

上杉家伝来鎧下着・着込み・頭巾等四領二個上

領の鎧下着(①②)は非常に小  
景勝所用と伝えられるこの二  
料となつてゐる。  
い、わが国最古の貴重な遺品資

表2. 伝上杉謙信所用頭巾類 法量一覧表

(寸法の単位はcm)

	頭 囲 り	高 さ (深 さ)	重 量
(5)烏帽子形白綾 頭巾	70.0	42.0	300 g
(6)鎖頭巾 (附属・中頭巾)	60.0 (58.0)	34.0 (21.0)	中頭巾とも 760 g
赤袖筒形頭巾	57.0	38.5	70 g
黒編子角形頭 巾	58.0	28.5	55 g

目的で作られているものが多  
い。しかし上杉家伝来のこれら  
には、当時は輸入品であった縮  
緬を用いたもの(②)や、多彩  
な型染めのもの(①)など、実  
用面とは別に贅や美を凝らした  
ものがあり、縮緬も、多色型染  
もその時代の資料としては他に  
類を見ないので、まことに珍し  
い、わが国最古の貴重な遺品資

ぶりで、一覧表の後身幅・前身幅・襟肩あき・背紐の長さ(麻の方は全  
長一〇二センチ、縮緬の方は全長九七センチ)と取付位置を見てもわかるよ  
うに、下着とはいえ成人男子が着用できる大きさではない。この大きさ  
だと、十三、四才から十六、七才までぐらいの少年か成人女子、成人男  
子ならば、特別に華奢で身長も一五三〜一五四センチぐらいまでの至極  
小柄な体格の人ということになる。  
この二領の鎧下着を伝来に従つて景勝所用とすると、成人後の景勝が  
普通以上の体格であつたとすれば、この二領は少年時代に着用されたも  
の、即ち永禄末から元亀年間頃(一五六七年頃〜一五七二年頃)のものとい  
うことになる。

ところでこの鎧下着二領が永禄末頃から元亀年間頃に出来たとする  
と、類品は現在のところ皆無であるから、紅縮緬鎧下着の資料価値もさ  
ることながら、紺麻地鑲繫ぎ矢車文鎧下着は、後述するように、この型  
染めでは型紙は少くとも八、九枚、工程も最少十九工程ぐらひはかかる  
と見做され、型染めの出来は図版I、II、III aで見られる通りであり、  
意匠も現代にそのまま生かされるような洒落たものであり、また沖繩の  
紅型にも関連がありそうな文様である点などから、技術・意匠両面でわ  
れわれは改めて室町末から桃山・江戸初頭の型染めを見直すことになつ  
たのである。

さて、景勝所用として伝来するこの二領は、大きさも形態も殆ど同様  
な鎧下着で、襟の形や襟首の留めは、鎧下着には屢々見られる曲線裁ち  
の襟、左右の襟首につけた共裂のくるみ鈕を共裂の乳(ループ)に通し  
て留める方式(挿図1)の西欧風な様式で、すでに元亀年間頃には服飾

染の麻を用いた綿入れ<sup>註3</sup>である。

麻は、特にここに用いられている苧麻製<sup>註4</sup>の裂地は吸湿性に富み、汗に濡れると肌から離れ、且つ乾きが早いといった特性があり、こういった点から夏の衣料としては極めて着心地がよく、古来、夏物として特に重宝がらわれている（京都大学内の生活科学研究所では、物理学と医学の二方面から「繊維製品の夏季の適合性について」実験研究を行ったが、その結果、わが国のような蒸し暑い夏の衣料には、布の硬さ、速乾性、透湿度―汗を通す程度―、放熱速度、着心地等の諸点から苧麻製<sup>註4</sup>のものが最高によいことが実証された<sup>註5</sup>）が、この紺麻地の鎧下着も無双仕立の袷という点から夏期用、乃至は冬を除いた季節の用に当てられたものと考えてよいであろう。紅縮緬の鎧下着は綿入れである点、表裂が柔かく暖かく軽い縮緬である点などから当然冬期用と考えられる。直接肌に接する裏裂に麻（苧麻）が用いてあるのは戦闘に於ける発汗時に備えたものと考えられる。それを証拠だてるようにこの裏裂の背中に当る部分には四ヶ所（左右にそれぞれ二ヶ所宛）に汗のしみあとが大きく残っている。

挿図1 紅縮緬鎧下着(2)襟首囲り部分  
山形 上杉神社蔵

における西欧の影響があったことが偲ばれるのである。

この二領は大きさや形はほぼ同じであるが、紺麻地の方は裏にも表と共の裂が用いてある無双仕立の袷で、紅縮緬の方は裏には紅

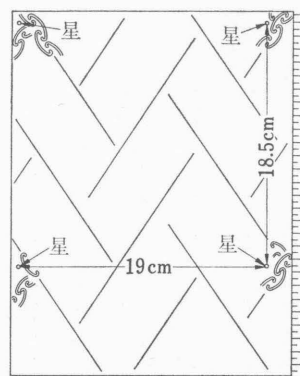
なお、上杉家伝来服飾類中、謙信・景勝所用と伝えられる衣料の中で麻に関するものはすべて新潟県六日町の伝統麻織物の研究家でもた作家である鈴木寅重郎氏に見ていただいたが、糸が太くて粗い織目の一見して大麻かと思われる麻織物もすべて苧麻であることが明らかにされた。謙信・景勝所用の衣料は越後が上杉領であった時代のものであるから、これらの麻織物は越後産と見てもよいであろう。

また、景勝所用と伝えられる鎧下着二領の背紐の芯には白木綿が用いられており、その他上杉家伝来の謙信・景勝所用服飾類には芯裂等に屢木綿裂が用いられているが、木綿は室町時代に主として朝鮮から輸入され、綿種も木綿と共に伝来し普及して各地で試作され、やがて国産の木綿も農家の副業として織出されるようになる。明応三年（1504）越後上杉領での「みわた」、永正七年（1510）奈良市場に出まわった三川（河）木綿がその早い例となっているので、上杉家伝来のこの手の木綿は上杉領の越後産「みわた」の可能性も多いと考えられる。木綿の遺品資料として現在のところわが国最古である。

白平絹鎧下着（③）は謙信所用と伝えられる綿入れで、一覽表の法量でもわかるように前記二領よりも大ぶりで成人男子用、袖に三角の襷裂が入った筒袖である。袖の形と丈が短いこと以外はその時代の小袖と殆ど変らない（美術研究二二八号一七頁の近世小袖実測寸法比較対照表―男物―参照）。節織の白平絹を表裂にも裏裂にも用いた純粹に実用面のみを考慮して作った鎧下着である。

これも謙信所用と伝えられる鎖帷子（④）は、黒麻地に鎖が縫いつけられている下に着込む実戦用の衣料で、一覽表で見られるように衿な

どから成人用と見做され、鎖頭巾(⑥)と共に生身の防護がつぶさに計算、考慮されている。白平絹鍔下着(③)と同様に装飾物は一切ない。両脇は着込むのに便利なように縫い合わせてなく、裁ち放しになっている。鎖の重量のために極めて重く、鎖帷子の方は三・九キロ、鎖頭巾中には被る丸形頭巾も共で七六〇グラムである。なお鎖頭巾は兜や烏帽子形白綾頭巾(⑤)のような頭巾の下に被ったもので、この謙信所用の鎖頭巾は表面は黒縹子であるが朽損しているので鎖を縫いつけた麻が見える。この麻は染めても晒してもない薄黄茶色の麻で、表裂の黒縹子との鎖つきの麻裂との間には綿が入っている。後頭部中央の下方が割ってあって被りやすくなっており、前には紫のなめし革の紐が左右につけてある。この頭巾には頭にじかに被るものとして黒縹子の丸形頭巾がついている。これは頭に密着するような形で、鉢巻状の縁取りが額から後頭部にかけて囲っている。この丸形頭巾には紙の芯が入っており、裏には節織の浅葱平絹が用いてある。鎖帷子の麻も、鎖頭巾の麻も太い麻糸で織られているが何れも芋麻<sup>註7</sup>である。



挿図2 文型矢車文紺麻地鑿繋ぎ  
説明「星」染  
(図合版II 照合)

烏帽子形白綾頭巾(⑤)も謙信所用と伝えられるもので、形としては烏帽子というよりも桃山時代の風俗画、例えば狩野長信筆の花下遊楽図などに、女が長い布で頭を筒形に巻いている形に似ている。松竹梅が地文の白綾製で、総角<sup>あけまき</sup>は赤、尖った烏帽子形部分の高さが四二センチあって、その形に合わせて中に籤<sup>ひ</sup>を粗く編んだ竹

籠のようなものが入れている。尾を引いたように長く垂れている二枚の裂は、正面の蝶結び風な飾りから続いている裂で、幅は約二〇センチ、垂れの長さは左右ともほぼ一メートル、まことに派手やかな白頭巾である。この白綾頭巾から連想されるのは、昔から川中島合戦の図というように現われてくる白布で頭を包んだ謙信の姿で、高さが四〇センチ余りあって、その上派手な垂れ飾りのついたこの白綾頭巾を実際にはどのように用いたものか、重い兜の代りに被ったのか、或は兜の上に夜目にも明らかなように二重に被って用いたか、鎖頭巾でも下に用いたのか詳かでないが、長く幅広の垂れ紐を風に靡かせて馬に乗った謙信は、さぞかし恰好のいい勇姿であつたらうと想像されるのである。

### 三 各鍔下着・着込み・頭巾について

- (1) 伝景勝所用紺麻地鑿繋ぎ矢車文鍔下着(図版I、II、III a、挿図2、3、4、5)

鑿繋ぎを檜垣に組み、その中に矢車を互い違いに配したこの連続文様は、型染で、それも多色染で行つてあることが明らかである。その筋の専門家でこの鍔下着を見た時、この優れた意匠と進んでいた型染技術に驚嘆しない者はなかった。ましてや概要でも述べたように上杉景勝が少年期に、即ち永禄末から元亀年間頃(一五六七年頃～一五七二年頃)に所用したものと推定されると、時代が室町末まで上り、類品は皆無ということですから驚きは大きくなる。中には写糊<sup>うつしり</sup>が出来てからの明治のものだとして譲らない染色家もあった。そういった専門家間の意見を種々

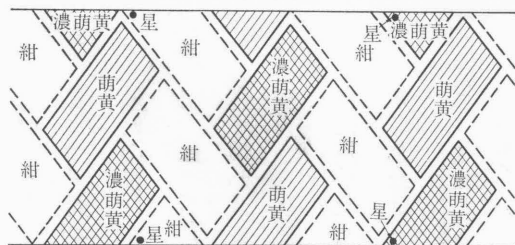
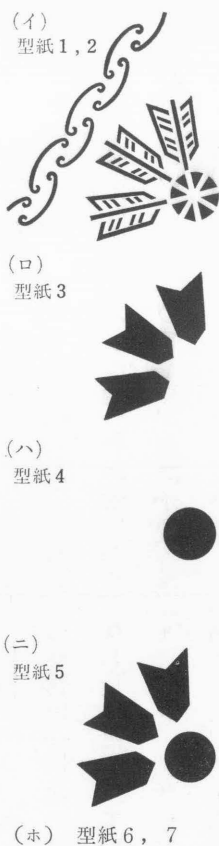
耳にして、これは染色技術面でも究めておく必要があると考え、当時東京国立博物館染織室長であられた山辺知行氏に相談し、長板中型染色家の松原福興・同利男両氏、紅染研究家の鈴木孝男氏、越後上布染織家の鈴木寅重郎氏、草木染色家の竹内庄造氏の御意見を伺いながら調査・考察を試みた。その間、他の調査、研究等が入り、結局十年余の歳月を費した事になった。かけた時間相応の研究結果は望むべくもないが、考察が事実の染色法にほぼ近似的はずれではない、といった段階で発表し、後は多数の御意見を伺うべきと敢て報告することとしたのである。

(観察並びに推測染色法)

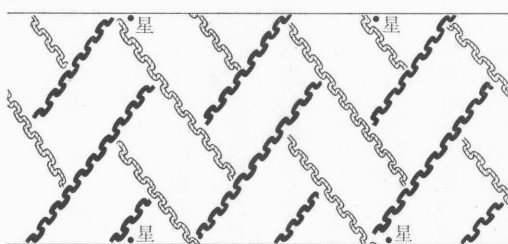
晒した白麻に糊置防染法を用いた多色の型染で、文様は鍔繫ぎを檜垣に組み合わせ、その中に矢車を互い違いに配した連続文様である。一見明治以降発達した型友禪風である。

鍔繫ぎは白抜き糸目の線<sup>註10</sup>であらわれ、その鍔繫ぎで表現された檜垣文は紺色地、注意して見ると、その地色は、檜垣文が堅一列おきに萌黄になっており(萌黄の列は檜垣が右上りの列)、更にそれは萌黄と濃萌黄の一段おきに置かれている(図版I、II、III a、挿図3ホ参照)。そして鍔繫ぎで構成された檜垣文の輪郭は濃紺である。

挿図3 紺麻地鍔繫ぎ矢車文型染の推測型紙説明図(イ)~(ホ)



(ハ) 型紙 8, 9



に生じた、線や色の同一方向へのずれが顕著であるのは、後世の寸分違わぬ精巧な型染とは異った鷹揚さだと見られる。

さて、型付の際の型紙のずれの跡や星で型染であることは明らかになったが、表だけの観察では文様部分の染色法も地染が引染であるか浸染であるかも見当がつかない。さいわい左脇と背紐の右部分にほころびがあつてこの裂の裏面を見ることが出来、次の諸点が明らかになった。

矢車の矢羽は白抜きの輪郭線で形どられ、黄土色に近い茶色であらわされておき、その芯部は八弁花風な円形で、更にその中心部とそこからそれだけの矢羽に向って伸びる線が放射線状に薄紅(純度が非常に高い紅で、<sup>註11</sup>R 6/10)であらわされている。八弁花の花弁のような部分は白抜きである(図版I、II参照)。

以上、観察された色は、白、紺、濃紺、萌黄、濃萌黄、黄土色に近い茶、薄紅の七色である。

図版IIは上前の胸の部分で、文様の一かえりがわかるようにトリミングしてある。この鍔下着の裂には縦一八・五センチ、横一九センチ間隔に、型付(型紙を置いて糊置したり色を挿したりする作業)の際に型紙を合わせた星<sup>註12</sup>が残っており、この図版では挿図2に示した個所に、黄土色に近い茶色(矢羽の色と同色)の染料がついている小さな丸があるが、それがその星である。この星で推測すると、文様の幅は布幅一幅で、一文様の長さ(文様の一かえり)は一八・五センチである。また、型付の際に型紙がずれたために

地の紺色は表の地の色と同じ濃度である。即ち地染は引染ではなくて藍の浸染である。

鰹繋ぎと矢羽の輪郭線は、表と同様に白抜き糸目の線であらわされている。即ちそれらの白線で表現された文様は、表と裏の両面から糊を合わせ置いて染料の浸透を防ぎ、くっきりとした細い白線に仕上げる努力がなされていた。

矢羽は表では黄土色に近い茶色であるが、裏面は黄味がかった紺色（萌黄色）になっている。即ち矢羽部分には裏面からは防染のための伏せ糊<sup>註13</sup>が置かれていなかったことになる。

矢車の芯部は白い円形で、その中心部と放射線状に表から挿した薄紅がほのかに浸透している。即ち矢車の芯部には防染のための伏せ糊が置かれ、白い部分の鮮明さと藍につかると色が消失してしまう紅の保護のために、地染の藍の浸染に備えていたことが判明した。

なお表裏両面の観察から次のことが推測された。両面糊置がなされている鰹繋ぎ及び矢羽の輪郭線、即ち白抜きの糸目に、処々、至って薄い色ではあるが黄土色や薄紅が認められる。仔細に当たると、薄黄土色は、矢羽の糸目と檜垣に組まれた萌黄色の列（挿図3(ホ)参照）の鰹繋ぎの糸目に、ほのかな薄紅は、矢車の薄紅の芯に近い部分の矢羽の糸目と、矢車の薄紅の芯に接した部分の鰹繋ぎの糸目に見られるようである。即ちこれは、裏面からの糸目糊置き（工程十、十一、十二参照）以前に矢羽や檜垣萌黄列の黄土色の摺染がなされたため、糸目部分は裏からの防染糊がないため摺の染料が裏をまわって糸目の部分に染み込んだことを意味する。その後、裏からの糸目糊置が行われるため、染み込んだ色は、浸染の際にも白抜き部分の範疇にあって両面糊置で防染されており、地色の紺に染まることなく仕上げた白糸目の中に色を残しているのである。

さて、これらの観察を通して推測される最も無理のない染色工程を次に

記述してみることにしよう。

工程一、二 型付一、二（型紙1、2の糸目型で糊置）

挿図3(ハ)に示した白糸目の糊置は一枚の型紙では無理で、この図様のためには二枚一組の型紙が用いられている筈である。この型付一、二では星はなく口で当<sup>註14</sup>っている。

工程三 型付三（型紙3で矢羽の黄土色染料の摺<sup>註15</sup>）

挿図3(ロ)、この型付から星がある。星は黄土色で裂に残っている。

工程四 型付四（型紙4で紅の摺）

挿図3(イ)、この矢車の芯の摺は型紙を使用しなくとも出来るかと思うが、使用したものと仮定する。紅はアルカリで溶解して酸で発色する。

工程五 型付五（型紙5で伏せ糊を置く）

挿図3(ニ)、型紙3、4を二手間で用いてもよさそうに思われるが、それは柔らかな伏せ糊の性質上出来難いし、第一に矢羽の上の伏せ糊跡と芯の上の伏せ糊跡のずれが何れを見ても一様に同方向になっていることから、これはここに示すように型紙5の型紙を用いたものと断定出来るよう。また、この伏せ糊は星にもおかれている。

工程六、七 型付六、七（型紙6、7で萌黄、濃萌黄の摺）

挿図3(ホ)に示した萌黄、濃萌黄の部分は二枚一組の型紙が用いられていると思われる。二枚を一枚にして拾う方法も考えられる。

工程八、九 型付八、九（型紙8、9で濃紺の摺、墨の摺のように観察される）挿図3(ヘ)に示した鰹繋ぎで構成された檜垣文の輪郭の摺にも二枚一組の型紙が用いられていると思われる。

工程十 乾燥し、裏を返えして

工程十一、十二 型付十、十一（型紙1、2の糸目型で裏からの糊置）

工程十三 型付十二（型紙4で矢車の芯の裏面からの糊置―伏せ糊―）



工程十四 乾燥

工程十五 両面より豆汁引き<sup>註16</sup>

工程十六 藍の浸染

この濃度だと藍には数回つけていると思われ、また、その途中で<sup>なま</sup>干しも行われているかと思われる。<sup>註17</sup>

工程十七 水洗<sup>水も註18</sup>

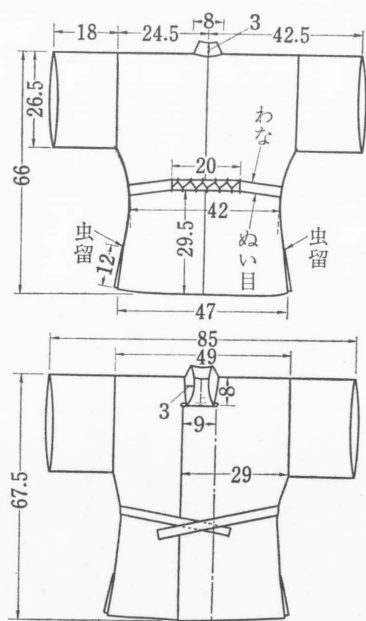
工程十八 乾燥

工程十九 仕上げ

以上、総工程十九、型付総数十二回、型紙総数九枚となる。これより少い型付の回数や型紙の枚数だと無理があると思われるので、ここに挙げた回数や枚数か、これより多少多いかであろうと考えられる。

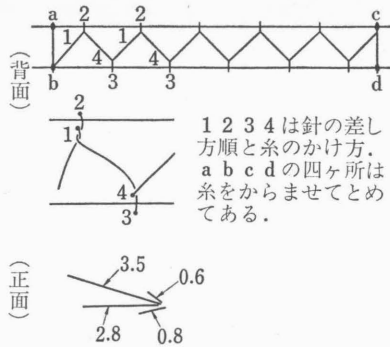
(形状、法量、仕立て方)

形状、法量は一覧表の(1)と挿図4の実測図に示した。裏にも表裂が使われている無双仕立である。袷で、上杉家に伝わる謙信・景勝所用といわれる衣服のうち袷仕立のものが大たい四つ縫の方法がとってあるように、この鑑下着も背縫、脇縫、袖附、袖下が四つ縫になっている。背縫の四つ縫<sup>註19</sup>

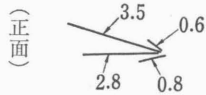


紐 巾 2.8cm, 長さ 102cm  
釦 直径 0.9cm  
袖口, 前裾, 後裾は突き合わせ

挿図4 紺麻地縹繫ぎ矢車文鑑下着(1) 実測図 --- は下前



1 2 3 4 は針の差し方順と糸のかけ方。a b c d の四ヶ所は糸をからませとめてある。



挿図5 紺麻地縹繫ぎ矢車文鑑下着(1) 背紐飾縫説明図

(裂地)

鶉色S燃の絹糸で、無双仕立袷の裏側にも糸が出るようにして飾り縫が施してある。背紐は前で重ね合わせ、背面の紐附飾りと同一の太い鶉色S燃の絹糸で挿図5に示したような飾り縫を施して綴じてある。  
縫糸は比較的明かるい紺色S燃絹糸で、縫目は二枚合わせの平縫は〇・二センチから〇・三センチ、四つ縫の平縫は〇・五センチ前後、くけ目は〇・七センチから〇・八センチの針目になっている。

は裾から五・五センチ上ったところまで表裂、裏裂別々に縫ってあり、脇縫は左右とも裾から十二センチ上ったところまでが裾脇あけになっており、その位置に紺色絹糸で虫留<sup>むしどめ</sup>がしてある。袖口(平袖であるが)と前身頃・後身頃の裾は突き合わせに縫い合わせてある。襟は紅縮緬鑑下着(2)挿図1)と同じ形で、曲線裁ち、襟首の釦留は左右に直径〇・九センチ厚み〇・五センチの共裂のくるみ釦がついて、同じく共裂の乳、即ちループ(この鑑下着の乳は共裂を燃って糊で固めてあり、紅縮緬の共裂の乳とは作り方を異にしている)に通して留めるようになってある。幅二・八センチ、全長一〇二センチの共裂の紐が、後から前にまわして結ぶ方式で背面にくけてある。わなが上、縫目が下につけてある。その背紐の右側に約六センチのほころびがあつて、そこから紐の芯裂が見え、白木綿と確認された。芯裂は紐裂より縫代分だけ控えて裁つてあり、一重の芯裂が、紐裂の縫代を除いた部分に裏打ちのように当てられて仕立ててある(従つて紐裂のわなのところは芯裂もわなになっている。紅縮緬鑑下着(2)の背紐も同様な方法で木綿の芯裂を入れてある。) 背面の背紐つけには、くけつけた上を挿図5に示したように太い鶉色S燃の絹糸で、無双仕立袷の裏側にも糸が出るようにして飾り縫が施してある。背紐は前で重ね合わせ、背面の紐附飾りと同一の太い鶉色S燃の絹糸で挿図5に示したような飾り縫を施して綴じてある。

上質の苧麻で、糸は経糸、緯糸ともに、いわゆる上布よりは太い。撚は経糸、緯糸ともにS撚。密度は一センチ間に、経糸は二二本前後、緯糸は一六越前後である。

### (背紐の芯裂)

白木綿で、概要でも述べたように上杉家伝来の謙信・景勝所用服飾類には芯裂等に屢々この手の木綿が用いられている。紅縮緬鎧下着(2)にもこの鎧下着同様背紐に白木綿の芯が入っている。撚の明瞭でない毛羽立った糸の平織で、密度は一センチ間に、経糸が一八本前後、緯糸が一六越前後である。

註1 わが国の衣服(和服)は、衣服の裂地を織幅一ばい利用する直線裁ち(直線裁断)であるが、西欧の衣服(洋服)は体形に合わせて作るため曲線裁ち(曲線裁断)である。

2 衣服の打ち合わせを留める場合に、釦を釦穴やループに通す釦留め方式は、わが国の衣服に従来からあったものではなく、近世になってから西欧の衣服様式より採り入れたものである。

3 この中入綿も真綿(絹綿)である。当時の綿入れは殆どすべてが真綿で、実物資料で最古の木綿細は毛利家に伝来する伝毛利秀就所用緋絹産衣の中入綿(美術研究二六七号一三頁参照)である。

4 わが国で出来る麻織物は一年生草本の大麻か多年生草本の苧麻の繊維で、それらの裂地を比較すると苧麻の方が上質である。

5 カラーデザイン(財団法人日本繊維意匠センター編集)昭和三四年七月号十五頁

6 古事類苑産業部十八の木綿、日本歴史大辞典(河出書房新社)「木綿織物」「木綿」。

7 新潟県六日町の伝統麻織物研究家、越後上布染織家の鈴木寅重郎氏にも調査していただいたところによる。

8 明治九年ごろ発明されたものと言われている。糊(従来は防染にのみ用いられて

いた)の中に染料(化学染料)を混ぜ合わせた色糊のことで、その色糊で型付を行う。型付のすんだものを蒸すと色糊の中の染料だけが裂にしみこんで糊は裂の表面にそのまま残る。水洗で糊分だけが落ちるため裂は思いのままの模様染め上がるのである。型友禪の発達に与って力のあったのはこの写糊である(拙稿「明治の型友禪―ミュージアム69号―」「明治の写友禪―ミュージアム71号―」参照)。

9 手描の友禪染に対して型紙を使用して糊置したり彩色したりする友禪染をいう。註8参照。

10 友禪染等の糊置防染法による染模様の中に見られる白い細い線。例えば花びらの輪郭線、葉の輪郭、葉脈等の線など、繊細な白抜き線を描き糊置防染法で表現したものを用いる。

11 日本色彩社発行「産業色票」(昭和三六年版)による記号を用いた。「色の三属性」をあらわし、5 Rは色相、6/10は明度が6/10を意味する。(鈴木孝男)

12 型のつなぎ目を正しく合わせるために型紙に彫ってある小さな丸印で、通常、一枚の型紙に、型先の両脇に二個と型尻の両脇に二個の計四個がある。型付の際にはこの尻星と口星を一型ずつ付け下げて行くのである。

13 広い部分を防染するための糊置で、伏せ糊は糸目糊に比べて柔かく、別名べた糊ともいわれる。

14 星のない型紙で型付する場合、星の代りになっている模様の一部を正しく合わせて型紙を送るが、「口で当たる」ということはその作業をいう。

15 型付の際に、染液を刷毛につけて摺り込む方法で、摺の場合は大い丸刷毛を用いる。

16 豆汁というのは白大豆を半日以上水につけたものをすり潰して漉した白色乳状液のことで、豆汁引きをするのは染料のつきをよくするためである。

17 藍の浸染で、例えば藍に数回つける場合だと二回目か三回目の後で干すことがあり、これを中干しという。その目的は、藍の空気による発色をよくし、裂地に藍の吸着がよくなされるため、完全に乾くまで干すことはない。

18 染めの終わった裂を水流(川や人工的に設らえた小川のような流し場)に浸して、糊や余分の染料を洗い落す作業をいう。



19 当時の拾仕立には四つ縫が行われていたようで、上杉家伝来の服飾類中にも、謙信所用と伝えられているものに浅葱袖裏紅練緯拾小袖(10) (美術研究二二八号二七頁参照)、浅葱綾竹雀紋繡・襟摺箱描絵胴服(5) (美術研究二四三号三三頁参照)、はぐま毛陣羽織(2) (美術研究二五九号二二頁参照)、緋雲文緞子陣羽織(3) (美術研究二五九号二二頁参照)、白雲文緞子陣羽織(4) (美術研究二五九号二三頁参照)等が、直江兼統所用と伝えられる浅葱緞子拾胴服 (美術研究二四四号四一頁―註51―参照)に四つ縫の方法が見られる。

### 美術研究所報

#### 第八回美術部公開學術講座

昭和四十八年十月二十七日、日本経済新聞社九階小ホールにおいて左記の通り行った。

藤原時代の彫刻 猪川 和子  
明治宮殿杉戸絵について 関 千代

#### 東京国立文化財研究所開所記念講演会

昭和四十八年十一月十七日、国立西洋美術館講堂において、舞楽に関する講演と映画の会を三部合同で左記の通りに行った。

舞楽面とその遺品	修復技術部	西川 杏太郎
舞楽装束とその遺品	美術部	田実 栄子
舞楽の楽曲構成	芸能部	横道 万里雄
映画「雅楽」		

#### 美術部研究員海外出張

久野健は昭和四十八年十月一日より十一月三十日まで、文部省在外研究員として、在外日本及び東洋彫刻の調査研究のため、アメリカ合衆国、連合王国、フランス、イタリア、ギリシャ、インド、タイへ出張した。

#### 研究会

昭和四十九年 三月六日 オランダ所在の川原慶賀の作品について 陰里 鉄郎

### 図版要項

一 紺麻地環繫ぎ矢車文鍔下着(原色刷)

山形上杉神社蔵

二 同 部分

三 a 同 背面

丈 六六cm 桁 四二・五cm 袖幅 一八cm 袖丈 二六・五cm

b 紅縮緬鍔下着 背面 山形上杉神社蔵

丈 六四cm 桁 四一・五cm 袖幅 一七cm 袖丈 三〇cm

一―三 神谷繁子「上杉家伝来鍔下着・着込み・頭巾等四領二個」参照

四 菩薩半跏像 斜左側面 長野観松院蔵

像高 三〇cm

五 誕生仏像 斜左側面 愛知正眼寺蔵

像高 八・三cm

六 薬師三尊像 正面 石川薬師寺蔵

薬師像高 一九cm 左脇侍像高 一六・六cm 右脇侍像高 一六・八cm

七 観音菩薩立像 正面 長野丸山茂氏他四氏共有

像高 二九・七cm 台座高八・〇cm

八 半跏思惟像 斜左側面 福井正林庵蔵

総高 三三cm

九 菩薩立像 正面 長野長福寺蔵

像高 三四・一cm

四一九 久野健「中部地方の古代銅像」参照